

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

論文提出者	東田 一仁	
論文審査委員	(主査) 朝日大学歯学部教授	堀田 正人
	(副査) 朝日大学歯学部教授	山内 六男
	(副査) 朝日大学歯学部教授	裕 哲崇
	(外部審査) 東北大学大学院文学研究科准教授	坂井 信之
論文題目 ヒトの心理状態が歯の色彩認知に及ぼす影響		
<p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>近年の社会的風潮を背景とした審美的関心の高まり、特に漂白、ホワイトニングの影響から、歯冠修復物の色彩に対する欲求はより高度に、より複雑になってきている。患者や学生の歯冠色に対する意識調査では不満を持っているものが多く、より白い淡い色彩を好んでおり、客観的に異常と思われない黄色味に対しても不満の対象になり易いとの報告がある。</p> <p>実際の歯科臨床において、歯冠修復物を作製する際の色彩決定にはシェードガイドを用いた視感比色法が主流である。そのため、歯科医師が歯冠色としてシェードガイドをもとに、歯種別、部位別等の統計値（経験値）や口腔周囲環境（残存歯等）との調和を考えて決定しても、その歯冠修復物の色に対して、患者が不満を訴えるケースを少なからず経験する。この現象は隣在歯や対合歯との調和や年齢相応という観点から歯冠修復物をみているというよりもより清潔、健康といったイメージから、白い歯冠修復物を好む傾向があることを表しているとも考えられる。これらの自己の歯冠色についての欲求の要因と考えられるものに患者固有の潜在的な意識、つまり心理的要因が結び付いているのではないかとと思われる。</p> <p>したがって、審美性に重きを置く患者と調和に重きを置く歯科医師とのコミュニケーションに誤解が生じることにもつながり、歯科医師が患者の歯の色に対する潜在的態度を把握しておくことは極めて重要であると考えられる。</p> <p>また、男性患者より女性患者の方が歯の色彩に不満が多い傾向にあるとの報告もあることから、女性を対象として、さらに、歯科医学の知識をあまり持たない一般女子学生と歯科医学の知識を有する歯科衛生士専門学生を対象に実験を行っている。</p> <p>本研究では上記2群に対して歯科用色彩計を用いてCIEL*a*b*表色系にて定量的に被験者の上顎中切歯歯冠部を測色した。さらに、自己の上顎中切歯歯冠色と思うものと希望の上顎中切歯歯冠色をシェードガイドから選択させてそのシェードガイドの色を測色した。</p> <p>また、被験者に対して心理学的性格検査（矢田部・ギルフォード性格検査；YG検査）を行うことによって、心理学的パーソナリティ（性格特性や心理状態等）を推定した。</p>		

その心理学的パーソナリティが自己の歯冠色の認知や選択した希望の歯冠色とどのように影響を与えるか検討し、その影響の程度を一般女子学生と歯科衛生士専門学生との間で比較検討を行ったものである。

その結果、一般女子学生はY G 検査における「抑うつ値」と「劣等感値」が高いものほど自己の歯の色を「暗く、黄色い」と思い込み、「白くしたい」と願望していることが明らかとなった。しかし、歯科衛生士専門学校生にはこのような思い込みや願望は抑制されていることが示唆された。さらに、「抑うつ値」と「劣等感値」が高い学生を抽出して検討したが、歯科衛生士専門学校生は一般女子学生より自己の歯の色を「暗く、黄色い」と思い込み、「白くしたい」との願望は、歯科医療の知識により低く抑えられることを明らかにしている。

したがって、歯科臨床に極めて価値のある所見を提出したものであり、審査委員は博士（歯学）の学位を授与するに値するものと判定した。